

目次

凡例	5
序	9
第一部 紀州家本源氏物語の概要	17
第一章 紀州家本源氏物語の伝来	19
第二章 紀州家本源氏物語の研究史	25
第二部 新出書入校本「校註日本文学大系校本」	31
第一章 「校註日本文学大系校本」について	33
第一節 「校註日本文学大系校本」の概要	33
第二節 「校註日本文学大系校本」の筆者	38
第二章 「山岸校本」について	45
第一節 紀州家本の引用本文について	45

第二節	陽明文庫本・平瀬本・伝慈鎮筆本の引用本文について	55
第三節	山岸徳平所引本文の問題	62
第三章	「武田校本」について	77

第三部 紀州家本源氏物語の形態とその本文

第一章	東洋大学附属図書館蔵「は、き木」私見	93							
第一節	東洋大本の概要	93							
第二節	東洋大本の伝来と本文	97							
第三節	東洋大本の書誌と筆蹟	105							
第二章	紀州家本源氏物語本文簡記	121							
桐壺卷	122	帚木卷	133	若紫卷	142	若菜 ^上 卷	145	若菜 ^下 卷	147
柏木卷	150	横笛卷	154	鈴虫卷	156	夕霧卷	158	御法卷	163
幻卷	166	匂宮卷	169	紅梅卷	172	竹河卷	175	橋姫卷	173
椎本卷	180	総角卷	184	早蕨卷	187	宿木卷	190	東屋卷	193
浮舟卷	195	蜻蛉卷	197	手習卷	200	夢浮橋卷	203		

第四部 紀州家本に見る源氏物語の読書行為と書写行為

第一章	読書の行為としての書写	215
第一節	紀州家本宿木卷冒頭部分の異文	215
第二節	宿木卷と桐壺卷	218
第三節	書写における記憶の再生と異文	221
第四節	読書の再体験としての書写	228
附章	源氏物語読例——物語の現実感について——	245
第一節	野分の段の四季をめぐって	245
第二節	情景描写の現実感	252
第三節	感覚・感情表現の現実感	259
第四節	源氏物語の世界構築	267
結		277
後記		283
初出一覧		287

凡例

一、本書における散文作品は主に『新潮日本古典集成』に、和歌は『新編国歌大観』に拠る。これら以外から引用の場合は、その都度注記する。なおいずれにおいても、適宜私に表記を改め、句読点、括弧の類を施した箇所がある。

一、第四部附章以外において引用、比較に用いる『源氏物語』の本文は基本、『源氏物語大成 校異篇』、『源氏物語別本集成』に拠る。但し影印、複製、翻刻の類が刊行されているものについてはそれらに拠る。それらを列挙すれば次の通りである。(現在の所蔵先にかかわらず、旧来呼び習わされた名称で示す。)

飯島本——池田和臣編・解説『飯島本源氏物語』(笠間書院、二〇〇八—〇九年)

御物本(各筆源氏)——日本古典文学会監修『御物各筆源氏』(貴重本刊行会、一九八六年)

国立歴史民俗博物館蔵帯木巻・手習巻——国立歴史民俗博物館蔵史料編集会『国立歴史民俗博物館蔵貴重

典籍叢書文学篇』第一八巻(臨川書店、二〇〇二年)

従一位麗子本——渡部築『源氏物語従一位麗子本之研究』(大道社、一九三六年)

相愛大学春曙文庫蔵帯木巻・藤裏葉巻・橋姫巻・宿木巻・手習巻断簡——田中重太郎編『源氏物語断簡』(東風社、一九六四年)

天理図書館蔵伝藤原為家筆帯木巻、伝源頼政筆柏木巻、伝藤原俊成筆鈴虫巻・夕霧巻、伝西行筆竹河巻

——『天理図書館善本叢書 源氏物語諸本集一・二』(八木書店、一九七三・七八年)

中山本―国立歴史民俗博物館蔵史料編集会『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書文学篇』第一七卷（臨川書店、二〇〇〇年）

伏見天皇本―吉田幸一編『源氏物語伏見天皇本影印』（古典文庫、一九九一―一九五年）

藤原定家監督書写本若紫卷―大河内元冬監修、藤本孝一改題『定家本源氏物語 若紫』（八木書店、二〇二〇年）

尾州家本―秋山虔・池田利夫編『尾州家河内本源氏物語』（武蔵野書院、一九七七―七八年）

蓬左文庫蔵伝藤原為家筆竹河卷、伝源頼政筆総角卷、伝藤原為家筆浮舟卷―日本古典文学会編『日本古典文学影印叢刊 源氏物語古本集』（貴重本刊行会、一九七三年）

穂久邇文庫本―日本古典文学会編『日本古典文学影印叢刊 源氏物語一―五』（貴重本刊行会、一九七九―八〇年）

保坂本―伊井春樹編『保坂本源氏物語』（おうふう、一九九五―九七年）

陽明文庫本―陽明文庫編『陽明叢書国書篇第十六輯 源氏物語』（思文閣出版、一九七九―八二年）

一、紀州家本の引用には、「校註日本文学大系校本」を用いる。引用に際しては、次の1―3に従う。

1 該本から引用するに際し、書入の有様を厳密に伝えるべきであるが、煩を避けるため、『校註日本文学大系』の本文に書入を反映して復元した本文を掲出する。

2 「原文「…」」の注記がある箇所は、原文を反映して復元する。

3 該本の書入筆者が『校註日本文学大系』の本文に振られたルビに対して如何なる処置をとっているのか不明であるため、『校註日本文学大系』に振られたルビも残したまま引用する。

一、「校註日本文学大系校本」書入本文との比較の便宜を考慮し、紀州家本以外の本文については、引用に際して次の1―3の処置を施すことがある。

1 句読点と濁点を打ち、会話文には「」を施す。

2 検討対象外の部分については、適宜漢字を当てる。その場合、原文の表記はルビで示す。つまりルビを辿れば原文を復元できる。

3 原文において省略されている送り仮名と助詞を適宜「」で補う。

一、本書掲載の図版はいずれも鮮明に映るよう若干の補正を加えている。

序

本書は、佚亡したものと考えられる『源氏物語』の写本、紀州家旧藏伝阿仏尼等筆本（以下、紀州家本）に関する研究である。紀州家本は、鎌倉時代書写の五十四帖揃本で、一般に知られている本文とは異なる珍しい本文を持つ『源氏物語』として知られていた写本である。

紀州家本が、『源氏物語』研究において、どのような価値を有する写本であるのかを知るためにもまず、『源氏物語』の本文研究の現況について記す。

『源氏物語』の諸伝本の本文は、『源氏物語』研究の権威とされる、池田亀鑑（一八九六―一九五六年）によって、青表紙本、河内本、「別本」の三系統に大別された。

青表紙本は、鎌倉時代初期の歌人で古典学者の藤原定家（一一六二―一二四一年）の校訂に成る伝本群を言う。定家の校訂に成るとは言い条、青表紙本とされる諸本間においても、程度の差があるものの、異同が存しており、その成立の詳細については謎が多い。青表紙本は鎌倉時代においては、後述する河内本の陰に隠れていたが、室町時代以降、歌道における定家尊崇の風が強まるにつれて、河内本に取って代わり、通行本文の地位を占めるに至った。江戸時代、明治時代に流布した『首書源氏物語』（一竿斎著、延宝元（一六七三）年刊）、『湖月抄』（北村季吟著、同年刊）も、青表紙本の本文とされる。現在も『源氏物語』の物語研究は、基本的に青表紙本の本文に拠って行われている。

青表紙本とともにその名が挙げられる河内本は、鎌倉幕府政所初代別当にして歌人でもあった源光行（一二一三—一二四四年）が、嘉禎二（一二三六）年二月から二十一本の伝本を校合し始め、その息親行（生歿年不詳）が建長七（一二五五）年七月に一旦完成させた校訂本文を基礎とする伝本群である。河内本という名称は、光行、親行父子がともに河内守に任ぜられたことに由来する。前述したように、鎌倉時代においては河内本優勢であったが、室町時代以降は影を潜め、市井に流布しなかった。大正末年から昭和初年にかけて、平瀬本、尾州家本と言った重要伝本が発見されたことで、河内本の研究も進展したが、様々な伝本の本文を取り合わせた混成本文、すなわち不純な本文という認識が強いためか、今なお河内本を用いて物語研究が行われることは無く、河内本を底本とした校注本も刊行されていない。

残る「別本」は、青表紙本、河内本のいずれにも属さない孤立した伝本について、池田が用いた便宜的呼称である。池田は「別本」について、『源氏物語大成 研究資料篇』（中央公論社、一九五六年）第二部第五章「別本の呼称とその性格」において、次のように言う。

青表紙本でもなく河内本でもない認められる諸本を、系統分別などを考慮に入れず悉く一様に「別本」の呼称において扱ったわけである。従つて「別本」なる容器の中には、系統の明らかでない種々様々の孤立した伝本が、何の秩序もなく雑然と詰め込まれてあるわけである。上品な喩ではないが、屑屋の籠のやうなものである。これは後で分類・整理されることを必要とする。それが「別本」なる呼称のもつ雑多性である。従つて別本は必ず整理されなければならない。

池田は、この「何の秩序もなく雑然と詰め込まれ」た「屑屋の籠のやうな」「別本」を、続く第一節「別本の種類」において次のように分類している。私に整理して掲げる。

- 一、河内本成立以前の古伝本である場合。
- 二、河内本成立以後の混成本文を有する伝本である場合。
 - イ、青表紙本と河内本との混成
 - ロ、青表紙本と古伝本との混成
 - ハ、河内本と古伝本との混成

三、註釈的意図によつて取扱はれた本文である場合。

四、絵詞・古註釈・古系図等に摘用引抄されて残存する本文である場合。

本書で論ずる紀州家本もまた、青表紙本、河内本、いずれの系統にも属さない本文を持つということから「別本」とされた。そして、その書写年代から、青表紙本、河内本以前の古態が認められる伝本、右の分類で言うところの一に該当すると考えられており、五十四帖揃本であるということからも、その本文の解明が俟たれる伝本であった。

しかし、紀州家本は先の大戦中に佚亡してしまふ。その経緯については、第一部第一章に記すが、戦禍に巻き込まれて焼亡したと推測される。かつて紀州家本の本文が、活字本の『源氏物語』に書き入れられた校本があったことも知られているが、それらも今に伝わらない。本文資料が残存しないため、紀州家本の本文は謎に包まれていた。

そのような状況にあつて、近時、若菜^上巻から夢浮橋巻までの紀州家本の本文が書き入れられた校本を新たに見出した。第二部第一章において紹介するこの「校註日本文学大系校本」によつて、謎多き紀州家本の本文の約三分の一を明らかにすることが可能となったのである。